

論 説

中国における賀川豊彦評価をめぐって

——1920年から1949年の事例研究——

金 丸 裕 一

はじめに

筆者は既に、『賀川豊彦関係 中国語雑誌・新聞記事史料（暫定版）』（立命館大学経済学部 金丸裕一研究室，2016年6月），及び「賀川豊彦関係中国語文献目録（初稿）—1920年～1949年」（『立命館経済学』第65巻第1号，2016年8月）において，中華民国期中国において発表された賀川豊彦¹⁾（1888-1960）に対する論評やその評伝・記事・作品翻訳などを，不十分ながらも整理・公開した。従来の賀川に対する中国からの評価を論じた先行研究が，主として宣教師文書などの英語史料を中心に進められてきた研究史的状況を鑑みると，この史料集や目録には遺漏や不備が多々あるとはいえ，今後の議論を喚起するための役割は，十分に担い得る水準にあると自負している³⁾。

本稿では，これらにおいて示した文献的知見を基礎に，1920年から1949年に到る期間—即ち，五四反日運動から満洲事変，「支那事変」，「大東亜戦争」，日本敗戦，中国の内戦と共産化前夜という激変期—における，中国人を主語とする所の賀川豊彦評価をめぐり，初歩的な分析を試みる。

近年の慶賀すべき状況として，中国人若手研究者による類似した課題をとりまく優秀な研究が，同時進行的に生産されている点が特記されよう⁴⁾。但し，「平和の使徒・賀川豊彦」という既成イメージの影響もあってか，特に戦時期の諸問題については，十分な議論が展開していないようにも見受けられる⁵⁾。よって，ここで提起する幾つかの問題について，近未来的に展開されるであろう本格的議論のための素材に供することを，小稿の唯一の目的としたい。読者諸賢は，前記した文献目録を手元に置きながら，拙稿を読み進めて頂ければ幸いである。

I. 「賀川豊彦関係中国語文献目録（初稿）」の鳥瞰

一見すると無機質に見えてしまう文献目録ではあるものの，ここには合計157件に及ぶ賀川豊彦に関する中国語文献（記事や書籍）を収録した。この他，既に幾つかの新聞報道等の未採録が確認されているが⁶⁾，調査範囲を拡大させることによって，更に多くの情報を得られるであろう。但し二つの仕事を通じて，全ての収録史料への容易なアクセスを利用者に向けて開いておいた。したがって，日本国内における文献蒐集時に発生が予想された様々な障壁は略々クリアされてお

表1. 賀川豊彦関係作品の概観

事項 年	分 類			件 数
	書 籍 : 記 事	原 著 : 翻 訳	一般紙誌 : 基督教系	
1920	— : 2	1 : 1	2 : —	2
1921	— : 3	1 : 2	3 : —	3
1922	— : 6	4 : 2	6 : —	6
1923	— : 2	— : 2	2 : —	2
1924	— : —	— : —	— : —	—
1925	— : 3	3 : —	3 : —	3
1926	— : 3	— : 3	2 : (1)	3
1927	2 : 6	7 : 1	3 : 5	8
1928	2 : 7	4 : 5	1 : 8	9
1929	1 : 3	— : 4	— : 4	4
1930	— : 17	9 : 8	3 : 14	17
1931	— : 21	10 : 11	2 : 19	21
1932	2 : 7	1 : 8	— : 9	9
1933	— : 6	2 : 4	1 : 5	6
1934	1 : 18	15 : 4	— : 19	19
1935	1 : 5	— : 6	— : 6	6
1936	1 : 8	5 : 4	1 : 8	9
1937	— : 3	2 : 1	— : 3	3
1938	— : 1	1 : —	— : 1	1
1939	— : 4	2 : 2	3 : 1	4
1940	1 : 6	6 : 1	2 : 5	7
1941	1 : 2	1 : 2	1 : 2	3
1942	— : —	— : —	— : —	—
1943	— : —	— : —	— : —	—
1944	— : 3	1 : 2	1 : 2	3
1945	— : 2	1 : 1	1 : 1	2
1946	— : 1	1 : —	1 : —	1
1947	— : 2	— : 2	— : 2	2
1948	— : 1	— : 1	— : 1	1
1949	— : 3	2 : 1	1 : 2	3
合計	12 : 145	79 : 78	39 : 118	157

(註) () 内は未確定である。

(出典) 各紙誌の内容をみながら、筆者が作成。

り、議論に際する公平性確保という意図は、達成されているだろう。よって、史料発掘・整理の作業が完遂する以前の段階ではあるが、現時点における中間的な考察を加えたい。

※ ※

①まず、刊行された時期の問題から。

表1によって明らかな通り、賀川豊彦は中国において、通時的な関心を集めていたわけではなかった。件数から見ると、1930年(17件)、1931年(21件)、1934年(19件)と、二桁を記録した年は3年のみである。

彼の中国訪問は、(a)1920年8月から9月、上海日本人YMCA夏季自由大学講師と、続く中国各地訪問(32歳)；(b)1925年7月、米国・欧州訪問復路における省港スト及び五卅運動下の香

港・上海寄港（37歳）；(c)1927年8月、上海における「基督教化経済関係全国大会」への出席（39歳）；(d)1930年7月から8月、上海・杭州・莫千山での伝道（42歳）；(e)1931年1月から2月、香港・上海・青島・済南・曲阜・蘇州・南京・浦江などでの伝道（42歳）；(f)1934年1月から3月、フィリッピン伝道旅行の往路での上海寄港と、復路での香港・広州・上海における活動（45歳）；(g)1938年11月、インド・マドラスにおける世界宣教大会出席の往路における上海・香港寄港（50歳）；(h)1944年10月から1945年2月における所謂「宗教使節」としての派遣（56歳）であったが、(c)から(f)に到る8年間で記事数が93件と、全体の6割弱を占めている。

周知の如く当該時期は、山東出兵から満洲事変、第一次上海事変と、日中間の懸案が全面対立寸前の次元にまで緊張したものの、しかしながら「支那事変」という欺瞞的名称を以て呼称された実質的的全面戦争には、陥っておらぬ段階であった。

同じような角度から表1を眺めていると、1937年7月7日の「事変」勃発後に到ると、賀川に対する関心は、急激に低下したようにも読み取ることが可能である。数字自体は挙がっているものの、これらの掲載元を分析すれば、戦時期（1937年7月～1945年8月）の場合、大半が対日協力を標榜する媒体を通じての拡散だったのである。

更に、敗戦後の日本において賀川は、再び時代の寵児としての脚光を浴び、東久邇宮敗戦処理内閣の参与や、勅撰貴族院議員としての公的な地位を獲得した。しかのみならず、内閣総理大臣候補として米国当局者の目に留まったと云われるものの、隣国における関心は戦前以上には抱かれなかった可能性が高い（無論、今後の史料発掘を待たねば、最終的な断定はできないが）。

②次に、書き手の問題について。

実は、中国語において公刊された賀川豊彦関係の文献は、翻訳が半数を占めた。表1のうち、中国人の手によると確定／推定できる賀川に対する論評や紹介・取材は78件であった。残る79件は日本語を含む外国語からの中文訳、あるいは海外通信社などによる配信記事である。原著者が賀川自身による（あるいは「チーム賀川」による）作品の中国語訳だけでも50件、全体の約3割強に達している。

また、賀川の評伝についても、上海YWCA 劳工部幹事（1926-1928）を務めていた米国YWCA 幹事E・ヒンダー（E. Hinder, 生没年不明、「邢徳」女士）による作品の中国語訳（『日本基督教社会主義者 賀川豊彦評伝』1928年3月）以降、ウィリアム・アキシリング（William Axiling, 1873-1963）による「賀川豊彦伝」（1933年）や『賀川豊彦の生平』（1935年4月）、ガンジー・シュヴァイツァーと並び賀川を「世界三大偉人」として絶賛したアレン・ハンター（Allen A. Hunter, 1893-?）による「賀川豊彦」（1935年9月）や「名人伝記賀川豊彦」（1936年11月）、鶴見祐輔（1885-1973）の「賀川豊彦」（1935年11月）、テ・テ・ブランボー（Thoburn Taylor Brumbaugh, 1896-1974）の「賀川豊彦—基督教社会主義者」（1947年2月）など、日本宣教に深く関連した欧米人宣教師の手による作品の翻訳が多い。

翻訳作品は、賀川思想の中国伝播、あるいは翻訳経由の交流／関係史的な課題、さらに宣教師による言説が日中両国に到来した際の受容状況などを解明する際には重要な素材となるが、「同時代を生きた中国人による賀川評価」という小稿が探究せんとする主題からすれば、「訳序」や解説部分を除いて、とりあえずは検討の対象外に置かれるだろう。

③最後に、これら史料を刊行した出版社や紙誌の性質について。

12冊の書籍の刊行元を見ると、上海太平洋書店から出版された1冊（『基督教社会主義論』1928年3月）を除いて、全てが広学会と中華全国基督教協進会という、キリスト教系の組織から発行されている。同様にして雑誌の刊行元を調査した結果、たいへん興味深い現象が発見できた。すなわち、非キリスト教系と確定／推定できる雑誌や新聞に掲載された記事は、『東方雑誌』（2）や『新青年』（1）、『少年中国』（1）、『婦女雑誌』（2）、さらに近代中国の代表的新聞である『申報』（19）を含めて合計で39件であるものの、これらは1920年代に集中している。1930年代以降になると、賀川豊彦に関係する記事類の大部分は、教界内のメディアにおいてのみ、掲載されていたのであった。

ちなみに、文献目録において登場する雑誌類の中で、筆者がキリスト教系であると確定したのは、次の通りである。発行地を付すと共に、括弧（ ）内には掲載された篇数を記入しておいた。

『興華（週報）』上海(17)；『佈道雑誌』長沙(9)；『明灯』上海(8)；『真理與生命』北京(8)；『聖公会報』武昌(5)；『女青年（月刊）』上海(5)；『平民月刊』上海(5)；『真光（雑誌）』広州(5)；『河南中華聖公会会刊』開封(5)；『中華婦主』上海(3)；『青年進歩』上海(3)；『中華基督教全国総会公報』上海(2)；『中華基督教教育季刊』上海(2)；『上海青年』上海(2)；『中華基督教女青年会会務鳥瞰』上海(2)；『天風』上海(2)；『長江青年』南京(2)；『文社月刊』上海(1)；『微音』上海(1)；『金陵神学誌』南京(1)；『南大青年週刊』広州(1)；『嶺南大学校報』広州(1)；『私立真光女子中学校校刊』広州(1)；『田家半月報』済南(1)；『南風』広州(1)；『角声』上海(1)；『明灯道声非常時期合刊』不明(1)

中華民国における政要とキリスト教信仰の結合については、既に幾つかの研究が指摘するところであり、蒋介石・宋美齡夫妻のメソジスト信仰を媒介とした欧米との関係性強化などは、広く人口に膾炙している⁸⁾。しかし他方で、1930年代前半においても50万人を下回ったと記録されるプロテスタント教会信徒数を鑑みると、この限定が意味する事柄については、熟考する必要性が高い。直言すれば上記の雑誌リストに並んだ史料における言説を以って、果して主語としての「中国」乃至「中国人」が云々といった議論が可能であるか否かといった、初歩的な問いが立ち上がるだろう。賀川豊彦の近代中国における「影響力」といった問題は、その範囲や対象について、蓋然性の高い説明が求められるのである。

※ ※

以上の鳥瞰を踏まえるならば、例えば現在においても声高に主張されるような評価、すなわち「賀川は何度も中国を訪問していますが、日本の中国侵略についても賀川は心を痛め、中国における講演において、あるいは『涙に告ぐ』という詩を作るなどして謝罪の気持ちを表して」いる等といった¹⁰⁾、「平和の使徒・賀川豊彦」を取り巻く「通説」についても、評価された場所や時期の厳密なる確定を経て、さらに侵略された側からの言説や評価を踏まえた上での妥当性が、再検証されるべきであろう。

次章からは、賀川を評価する主体（誰が語ったか？）、及び評価された内容（何が語られたか？）について、個別事例に立ち入って紹介しながら検討を加え、戦時下中国側における「賀川像」の在り方への展望を探りたいと思う。

II. 先行者としての賀川豊彦——1920年代——

まずは、一般紙誌における「描き方」から探ってみたい。

1920年代の前半、「中国デビュー」を遂げた当時の賀川豊彦に対する中国からの関心は、驚くほど高かった。すなわち、陳独秀（「労働者底知識從那里来？」1920年11月）、夏丐尊（「賀川豊彦氏在中国的印象」1922年7月）、といった著名な人物による言及があり、更にメジャーな雑誌における紹介なども、この時期に集中している。

中国共産主義運動の初期指導者・陳独秀は、賀川を「一人の良心ある学者であり、彼は神戸の貧民窟に十数年間居住しながら、貧民の支援に専心しているが、二カ月前に上海に来て中国の貧民窟を調査した」と紹介、大阪における労働問題講演を引用しつつ、「工人には知識が欠乏しているから給与が増加しないのだと主張する人々は、賀川先生が挙げた事実に注意するべきである！」と、食料不足による身体未発達が諸悪の根源的原因だとした賀川の指摘を挙げる¹¹⁾。但し同時期の陳独秀が、キリスト教的な発想や方法そのものに対しては、懐疑的な感想を示していた事実についても、わたくしたちは留意するべきであろう¹²⁾。

日本留学経験を持つ作家・夏丐尊の場合、「賀川豊彦氏は日本の著名なキリスト教社会主義者であり、また文学家でもある。貧民に同情して、貧民窟に長年身を投じている」と紹介しながら、『星より星への通路』（1922年6月）において語られる上海スラム街訪問、及び胡適との問答について、出版翌月には中国語訳・発表している¹³⁾。五四反日運動期の中国学生運動指導者として名高い黄日葵（1899-1930）も、1920年6月に神戸・新川スラムに賀川を訪ねた時に得た感動を、一編の詩に託して公表した¹⁴⁾。

1927年8月、中華全国工業委員会によって基督化経済関係全国大会に招聘された賀川は、10日に及んだ会議終了後の29日、国際工業服務協会（International Industrial Service League）の求めに応じて、上海の王立アジア協会において「日本劳工運動」と題する講演を行った。この内容を紹介した『東方雑誌』記事も、彼は、『貧民の救い主』、即ち「日本現代の精力旺盛なる社会改造家」であり、「神戸の貧民窟」という「世界で最も不潔な地区」から「その偉大なる建築事業」を開始したと評価するとともに、「日本有数の経済学者であり、普段から日本の労働者たちの生活状況に注意を払っている。彼は労働者たちの生活が困難極まりない種々の環境下であって、労働者が団結して自身の生活を改善する必要を深く感じている」と絶賛した¹⁵⁾。

表2には、『申報』における賀川豊彦に対する言及について、簡単に整理した。これによれば、1922年9月時点においては「神戸著名工党領袖」（「日本労働界将開紀念大会」1922年9月19日）と報道されて以来、五卅運動時期の上海における講演（「日本労働運動領袖来滬」1925年7月18日）、「日本無産階級政党分裂」（1926年10月26日）の報道と続く。1927年8月の上海訪問に際して、初めて「日本基督教会中の要人」（「日本社会運動家賀川豊彦来滬」1927年8月19日）といった肩書きが付加されているが、1930年における訪中の詳報（「華東大学夏令会詳紀」1930年8月11日）、及び1933年に外務省から欧米訪問代表団に選抜された旨の報道（「石井見廣田力説／対美親善特派使赴欧美遊説／誘美対満洲投資」1933年10月20日）を最後に、戦前の紙面からは姿を消す。

表2. 『申報』紙面における賀川豊彦

	年 月 日 (面)	記 事 名	内 容
①	1922年9月19日(6)	「日本労働界將開紀念大會」	日本労働協會會長鈴木文治氏、神戸著名工黨首領賀川豊彦氏及各地重要代表均將演說……。
②	1925年7月18日(9)	「美國學生觀光團今日來滬」	今下在青年會聚餐由方自來滬之社會運動名人賀川豊彦氏演講晚間由歐美同學會假韓玉蕪君家歡迎叔宴云。
③	1925年7月18日(13)	「日本働運動領袖來滬」	日本勞農弭合會會長賀川豊彦於昨日來滬賀川爲日本今日著名労働運動實行家崇信耶穌之博愛主義……。
④	1925年7月19日(13)	「日人對紗廠問題之意見」	日本労働運動領袖賀川豊彦氏因視察勞動問題於去歲赴歐美游歷現事畢返於前日乘船來滬……。
⑤	1926年10月26日(5)	「日本無產階級政黨分裂」	該黨逐呈四分五裂之象安部磯雄賀川豊彦兩氏亦已脫黨……賀川豊彦氏語人云無產階級運動因幹部意嚮時有變遷去……。
⑥	1926年10月27日(7)	「日本勞農黨準備選舉」	擬加入水手社全國會員二百萬人、擁安部磯雄、賀川豊彦、鈴木文治氏等爲首……。
⑦	1927年5月10日(17)	「日本愛護兒童之運動」	(大阪で) 兒童愛護講演會請賀川豊彦・山田若野・上俊夫諸氏講演……。
⑧	1927年8月19日(14)	「日本社會運動家賀川豊彦抵滬」	日本基督教協會要人賀川豊彦氏因受上海日本人基督教青年會演講之聘……。
⑨	1930年7月9日(11)	「華東學生夏令會開會期」	在普陀山舉行並已約日本勞工領袖賀川豊彦(Kagawa), 胡適之……。
⑩	1930年7月13日(16)	「日人賀川豊彦將來滬」	社會事業家賀川豊彦定十九日由神戸乘長崎丸赴滬……。
⑪	1930年8月11日(11)	「華東大學夏令會詳紀」	二十一日至二十六日先在滬江叙會是已約日本労働家賀川豊彦博士至普陀演講願賀川君無暇往因即在滬江舉行當時聽者之踴躍實足驚人蓋如賀川豊彦之爲人即觀其丰采亦已足矣……。
⑫	1933年10月20日(6)	「石井見廣田力說對美親善將派使赴歐遊說誘美對滿洲投資」	外務省當局擬定人選如下: 近衛文麿、幣原喜重郎、櫻井錠二、藤澤利喜太郎、賀川豊彦、池田成彬、各務謙吉、郷誠之助、兒玉謙次。
⑬	1940年2月3日(13)	「愛」	日本平民領袖賀川豊彦的話。
⑭	1941年3月16日(5)	「基督教要員賀川等將赴美」	東京國際馳譽之賀川豊彦等日本重要基督教工作人員九人、準備於三月廿七日買棹赴美、……。
⑮	1941年8月15日(6)	「印度詩聖泰戈爾訪問的回憶(一)」	日本基督教聞人賀川豊彦擬加入、因事中止。
⑯	1944年11月4日(3)	「日基督教領袖賀川談話」	國驗之日本基督教領袖賀川豊彦、昨日會見記者時宣稱、國際上唯有在經濟上、社會上、科學上、政治上、及教育上的合作、方能保持永久和平、……。
⑰	1945年1月5日(2)	「展望戰局的現階段(五)」	前幾日在某處碰到賀川豊彦氏、曾談到塞班島的白骨問題以及其戰綫美軍的殘虐性……。
⑱	1946年10月24日(4)	「在社共兩黨領導下日農拒向政府繳米日本農民組合現狀一斑」	日本農民組合……由基督教徒賀川豊彦及底山元治郎等所發起。
⑲	1949年5月11日(2)	「片山等將出席世界道德大會」	(片山と堀内謙介及び) 基督教社會工作家賀川豊彦、三代表將於五月廿九日自東京出發……。

(出典) 著者が紙面より作成。

これらの事実と、他の翻訳作品の状況などから判断するに、一般紙誌における「賀川豊彦」像とは、ベストセラー作家であるとともに、労働運動・女性解放運動・救貧事業に勤しむキリスト教社会主義者という、同時代の中国にとっても関心が高まっていた問題群の、日本における実践者としての在り方に、ほぼ集中していたのである。

ついで、キリスト教関係の媒体での状況について。

管見の限り、中国のキリスト教界が賀川豊彦に対して本格的に報じる嚆矢は、やはり1927年8月18日から28日に上海で開催された「基督化経済関係全国大会」招聘に係る上海訪問であった。この大会には中国内外から56名の参加者があり、中国国内のキリスト教関係者、ロッシング・バック（南京・金陵大学農林科教授）らの在中国宣教師の他、日本からの参加者として宮崎小八郎（東京基督教協進会）と陶屏（経歴・所属等不明）の名が記録される。¹⁶⁾

この中でも賀川は、8月22日から26日にかけての開会祈祷（霊修）を連続して5日間担当、これを受けて工業（22日）・農村経済（23日）・社会問題とキリスト教倫理（24日）・社会思想（25日）・キリスト教の社会的標準（26日）の議論が交わされていた。更に基調講演的な発題というべき「教会與経済問題」、及び「日本社会運動」という講演も行われており、将に八面六臂の活躍であったと云える。¹⁷⁾

中国においても1920年代初頭から、劣悪な労働を取り巻く諸問題の解決をキリスト教界の重要な使命ととらえる運動が本格化、いわゆる「社会的福音」のための活動が展開しており、たとえば貧民街の調査が本腰を入れて進められた。¹⁸⁾「基督化経済関係全国大会」に際して「大会領袖」の筆頭として賀川豊彦を挙げ、「日本の著名な社会改造家。彼は政治上の計画を備えた改造家であるだけではなく、靈に属した社会改造家」であると評価、貧民窟での活動の他にも、労働組合におけるストライキ指導、農民会社の組織、生活協同組合（消費合作社）などに触れ、「今日日本政治経済知識的の革命領袖」としたことは、極めて象徴的な事実であろう。¹⁹⁾更にこの会議に中国側メンバーとして参加していた陳其田（1900-1975）は、「賀川の偉大な生活の中にある二つの明確なる痕跡」として、「一是基督化、二是工人化」を指摘、「キリスト教徒となるにはキリストのようにならねばならず、労働者を援助するには先ず労働者とならねばならぬ」といった生き方をあげ、E・ヒンダーによる賀川評伝の訳者序文とした。²⁰⁾

1928年初頭になっても、「基督化経済関係全国会議」における賀川の印象は薄れていないようだ。YMCA 機関誌においては、「イエス降誕後二千年、東方には再び三博士が出現した。日本の賀川豊彦先生は、そのなかの一人である」といった書き出しの後、会議時の言動を振り返り、1927年5月以降の第一次山東出兵に対する賀川の憂慮も紹介した。曰く、2月に控えた普通選挙法体制下で誕生するだろう「新的日本」の指導者であり、かつ「中国と中国の国民運動に十分な同情を抱く」賀川の中国再訪問を、強く期待していたのである。²¹⁾

賀川のような「キリスト教徒は、実は我らの中国では最も欠乏しているが、最も必要な人物なのである」といった視点から、その半生を紹介した試みも生まれた。²²⁾あるいは社会改革の方法として、「共産党が用いる集産主義」、「社会民主党が用いる社会政策」、「国民党が用いる三民主義」と並列させて「賀川豊彦先生が主張する博愛互助の『協同組合（合作）制度』」を紹介、これを「生命・労働と自由」の「新たなる結合の中、私たちは真正かつ純粋な社会革命の精神を実現させる。強固で高尚な道德基準を備え、刀剣を用いず、砲火を用いず、殺戮を用いず、テロを用い

ず、美しく良好なる理想国を実現させることが、キリスト教徒の社会革命に対する態度であり、キリスト教徒が努力すべき方法である」とした。「キリスト教が存亡の危機にあり、四面楚歌の状況にある時、わたしたちが真の精神を一つ一つ実行して、表現していけば、人々から如何に虐げられ、如何に誹謗されようと、キリスト教は永遠に不滅であるが」、そうでなければ「滅亡への道」に到ると警告にも、²³⁾ 社会問題と福音を語るモデルとしての賀川への期待が、見事に反映されている。そしてこれらは、1920年代後半の中国社会における賀川解釈と中国への適用を論じた、多くの著作に通底した見方なのであった。

特に注目すべきは、ソビエト／中国共産党的な社会主義ではなく、キリスト教社会主義というオルタナティブな改革を推進せんとした賀川豊彦像の提示である。その背景には、ナショナリズム高揚と抱合せに展開した外国勢力による中国支配への反発としての、ミッション系学校からの教育権回収運動や、五卅反日反英運動を契機に高まった租界回収運動があり、これらを包摂しながら展開した非基督教運動に対する教界の危機感もあっただろう。「本色化」というキリスト教界自立への模索を進める一方、欧米との連携も視野に入れた穏健なる社会改良を追求する各層にとって、第一次国共合作の破綻と蒋介石による中国統一が現実的日程に上った時期にあって、同じく東洋の非キリスト教国リーダーであり、本質的に非共産主義者たる賀川の姿は、まさに恰好の先導者と映ったであろう。²⁴⁾ このイメージが、一般紙誌を経由して非キリスト教徒の間にも流出した過程こそが、1920年代後半中国の諸文献における関心の内実だったのである。

中国キリスト教界の指導部層による、かかる高い評価は、まもなく時局に起因する試練を迎える。即ち、日中間の各種緊張が、にわかには危機的状況へと陥ったのであった。その展開については、続く次章で検討しよう。

Ⅲ. 「平和の使徒」賀川にむかう期待と動揺——1930年代前半期——

1928年5月、満洲事変の導火線とも評価される済南事件が勃発、中国各地において反日機運が蔓延した。直後にキリスト教誌のために執筆（1928年7月19日）された賀川論には、日本における「百万生霊運動」、即ち「神の国運動」を進め、「十年以内に必ず百万人のクリスチャンを獲得し、日本をキリスト教国へと変えんとする」姿、その根本にある「レーニン主義の暴動と危険思想に抵抗する観点から組織した労働組合と農民組合」が、記されるのみである。²⁵⁾ また、賀川説教集に序文（1929年10月執筆）を寄せた中華基督教全国総会会長・誠静怡（1881-1939）は、「最近、賀川氏は我が国の被災民の状況に注意して」いる旨を紹介、「いつの日にか親しく中国を再訪され、福音を宣べ伝えんことを望む」とするも、時局に関連した言及は見られない。²⁶⁾

他方、一般誌の反応は、極めて速かった。国民革命軍軍事雑誌社が刊行し始めたばかりの雑誌には、対支非干渉全国同盟について「日本無産党領袖賀川豊彦が、²⁷⁾ 平和運動を発動するために、戦争反対同盟」に発展させた旨が、その綱領とともに速報される。²⁷⁾ そして、1930年初めに公刊された教界誌において、「彼は日本政府による満洲侵略の行為に対して大いに反対している。彼は社会の改良と国家の振興は教育から着手すべきであり、他人を侵略する必要は無いと考えているからだ」という、²⁸⁾ 高い評価が登場する。

かかる文脈からすれば、1930年7月から8月、及び1931年1月から2月にかけて、たて続けになされた賀川の中国訪問は、おのずと「賀川ブーム」の昂揚を招来したのであった。

まずは、1930年の訪中について。

1930年5月、「明治維新以後における社会運動指導者の第一人者」たる賀川が、杭州・之江大学で開催予定の中華基督教全国総会幹部会夏季会講師を応諾した旨、速報された²⁹⁾。上海・聖約翰大学に学び、安慶・聖公会聖保羅中学の教鞭を執っていた蔣翼振（1900-1983）は、6月に執筆した原稿において「私たちの中国では長年にわたって政治舞台における偉人が多すぎるものの、全民衆一とりわけ貧困の民一のために専心する者は稀」である。とりわけ「近年では、毎年戦災や水害・旱魃、共産匪や土匪が荒れ狂っている。最も可哀想なのは一般の貧しい民衆だが、顧みるに中国には『中華の賀川豊彦』が不在ではないか」と嘆いた。尤も日本人を称えるからといって、「わたくしが売国的親日派であると見ないで欲しい」といった断り書きが大書されている点に、微妙な時相が反映されてはいるものの。ここで蔣が見出した賀川とは、国籍を超え、「キリスト主義を篤信した実践者³⁰⁾」としての理想像であった。

ちなみに、上海への到着以降の動向は、日刊紙『申報』においても報道された（表2を参照）。仕事も家庭も投げ出して会場の滬江大学へと駆け付けた兪伯震（経歴・生没年等不明）は、講演記録をキリスト教誌に掲載、その詳細を速報している³¹⁾。

次に、1931年の訪中について。

この中国訪問は、極めて意味深長な「時」と「場」を得た紀行だった。なんとすれば、満洲事変と第一次上海事変勃発前夜という緊迫した時期を与えられ、旧知の上海周辺のみならず、山東出兵以来、日中対立が表面化した象徴たる済南などを舞台とした活動も、日程に組まれていたからである。香港を経て1月15日から19日に上海・滬江大学での講演、1月24日から27日までが済南での活動、1月30日から2月6日は山東省濰県で開催された中華基督教会及び華北長老公会代表との会議への列席と青島での伝道など、盛り沢山な行程であった³²⁾。

前年の夏、中華民国基督教大学学生代表団の訪日と重なり賀川の講演の聞き逃していた上海女子青年会幹事・田曜宝（生没年不明）は、彼が説く「キリスト教的兄弟愛（基督教的友情）」即ち Christian Brothhood に感銘を受けると共に、合作運動を中国において実行する行動の中に、民衆を救う道を見出した、と感想を述べる³³⁾。また、賀川講演を記録した聞保塘（経歴・生没年不明）は、「日本全国の民意は中国に対して非常に親善的であり、ひとり軍閥のみが拘るので、前年の山東出兵において武力が妄動された」という一節を、書き漏らすことは無かった³⁴⁾。

賀川イメージは、例えば同年3月、安徽省黄池における胡保羅（経歴・生没年不明）の説教、すなわち「東方で三博士が続出している。日本の賀川豊彦、中国の孫中山、インドのガンジーである。三人が捧げた贈物は、一つが博愛、一つが革命、一つが犠牲だ」といった譬えとして³⁵⁾、あるいは広州・嶺南大学全校演説会における演題に賀川豊彦論が設定された事などを通じて、キリスト教界の「偉人」として、更に増幅したことであろう。この訪問時、賀川が「謝罪」を行った事実について、既に布川弘が英文史料を用いながら指摘している。ここで確認した通り、中国人関係者のそれに対する評価は、非常に良好であった。但し、我々が細心の注意を払うべき事柄として、史料に対する厳密な検証があげられるだろう。以下、これを述べたい³⁷⁾。

1931年1月、済南における賀川の講演・説教に感銘を受けた齊魯神学院・郭一中（生没年不明）

は、同年3月に脱稿した書籍の中で、次の内容を記した。賀川は開口一番「中国の兄弟たちよ、日本を救して下さい」と述べた。これは「田中内閣による山東出兵は少数軍閥の行動に過ぎず、彼は大多数の日本国民と同じく賛成していない」から発せられた言葉であり、「中国と日本が更に宗教化・理想化しなければ、我々に平和はあり得ない」と説かれた。ついで、説教の模様や賀川の為人に関する観察・感想が書かれるが、「天国が先で国家は後」とする基本姿勢、行動を伴う信仰、そして「欧米教会の資金や宣教師に依存しないで事業を成し遂げた」³⁸⁾あり方に、中国教会による「新中国」建設の「一大原動力」を見出し、これを絶賛したのである。両国衝突の緊張下でなお「主による平安」を明言する態度、社会性を帯びた福音、更に中国教会の自立に向けた模範たる賀川の姿を、郭は「発見」したのであった。

確かに同書は、1932年に出版された評伝である。しかしながら、これは満洲事変を契機とした中国東北部の実質的植民地化が未だ開始されていない段階において、中国教界から提示された賀川評価であり、それらを超越することは不可能な歴史的産物なのである。翻訳作品の多産とは裏腹に、一般紙誌による賀川への反応が、これまでのところ確認できない状況も、気に掛かる変化であった。

1931年9月18日に勃発した満洲事変を、賀川は米国講演からの帰路に知った。ただちに船中において反戦詩「悩みの子」³⁹⁾を執筆して同人誌に掲載、まもなく中国語にも翻訳されている。更に、上述した郭一中が感銘を受けた「謝罪」についても、1931年12月という事変勃発後のタイミングにおいて『イエスの友』に英語訳が掲載され、これを原因に賀川は拘束された⁴¹⁾、という。しかし、キリスト教界内部を対象としたメディアを利用する地味な「反戦」行動とは対照的に、日本国内の「世間」から脚光を浴びるような場において賀川は、非軍事的手段による満洲領有の正当性を声高に叫び続けていたのであった⁴²⁾。

※ ※

1933年6月、中国人キリスト教徒が対立する日本を訪問、「国境を超えたキリストの愛（超国界的基督的愛）」に基づいて、日本人青年たちに「平和を語る」ための交流が実施された。約半月という短い日程であり、燕京大学・金陵女子大学・金陵神学院から参加した一行は、青山・明治・帝大・早稲田・女子英学塾・女子大学・自由学園・関東学院・近江兄弟社・同志社・神戸女学院などで集会を開き、相互理解の糸口を探った。メンバーの一人であった金陵神学院学生・張岩雪（1901-1950）は、帰国後に報告書を提出したが、ここに賀川豊彦との面談内容が記録されている。

6月25日の主日礼拝後に、面談は持たれた。「非常に高名なキリスト教徒であるから、彼の中日問題に対する態度を、皆はさぞかし知りたいだろう」と述べた後、張は次の内容を紹介した。
 ①自分が「進むことができる道は」、第一に「監獄に入る」選択、第二に「平和教育を創設する」選択だけである。
 ②満洲事変後に自分が「口に封印した」理由は、「日本は既に平和を破壊する大罪を犯しており、これを永遠に忘れぬためにも、徹底した平和教育を行わねばならぬ」からだ。
 ③東三省は日本人に耐えられる如き環境ではなく、「政府が高圧的政策で人民を移住させても、長続きはしない」。故に、中国が武力でこれを奪回せんとしても「労だけ多く功績はなく、犠牲を生むだけだ」。
 ④歴史からも中国人の同化能力が高いことは知られている。「日本が台湾を統治して数十年を数え、該地には中国人が多いため日本政府は教育に対して、まったく手を緩めない。

しかし（台湾の……引用者）中国人は、幼い頃から日本式教育を受けているものの、両国間で何かトラブルや戦争がある度に、彼らは常に自ら中国へと帰っている。自身を日本国民だと思っていないからだ。⑤従って、「日本による文化侵略は、恐れるに足らぬ」と。

こうした蒞蕪問答を展開した賀川に対して、張岩雪は「もしも賀川が勇敢であるならば、第一の道を選ぶべきだ。『死ぬか否かまだ定まっていない』というが、非戦のために生命を犠牲にしたとしても、各国で平和のために戦う青年を鼓舞せしめ、彼らの血を沸かせ、勇敢に前進させる」⁴³⁾だろうに、と。

1934年3月、フィリピン訪問からの帰路、賀川は広州や上海で活動した。中国教界は、「私たちは賀川豊彦に対して無限の希望を抱く。何故なら賀川しか日本を救い、東亜に真の平和を実現せしめる人はいないからだ」などと、大きな期待を寄せている。各地での活動については、キリスト教雑誌において詳細な報道がなされた。⁴⁴⁾更にこの短い訪中の大きな目的は、中国語に翻訳された『愛の科学』に、新しい序文を寄せるためであった。

「……我替日本对中国作一百万回的謝罪，也不能謝完了日本的罪罷。……我過於無力，我羞愧我没有感化日本軍閥的力量」といった「謝罪」を述べ、「不過，日本悔改而與中国結交了永久的友好的時候，那就除了藉着愛的法則以外没有別的路」⁴⁵⁾と、両国関係の修復にとっても「愛の法則」だけが必要であると説いた「著者新序」は余りにも有名であり、書籍は6月に出版された。賀川の1934年講演を速報した記事の中でも、この「新序」は好意的に評価されている。⁴⁷⁾

1935年4月、恐らくは『明灯』に連載されていたウィリアム・アキスリングによる賀川評伝が出版された。その訳者附記に該当する部分においても、次のエピソードが紹介されている。

「最近、賀川は再び上海を訪問、私たちに会うと、お詫びを述べた。日本の軍閥による九一八（満洲事変……引用者）と一二八（第一次上海事変……引用者）時における暴行を赦してほしいと求めたのである。歓迎会での演説で、賀川は日本軍閥の野心を痛烈に非難、その時には多くの日本人も着席しており、著名な日本人外交官は、賀川が話し終えるのを待たずに席を立ち、憤然と立ち去った。しかし賀川は全く意に介さず、語り続けた」⁴⁸⁾。

しかしながら、かかる「信頼」に混じって、賀川の演説をめぐり次のような厳しい見解も提出され始めている。

「彼のお詫びは、政治と宗教の其々の立場から、満足できる内容であるのか。……政治的には四つの大きな省の土地を占領し、数千万の命の生殺与奪を握っておきながら、僅かな言葉で事足りるのか。宗教的には、我々は個人の罪を赦す事は容易だが、国家の罪を赦す事は難しいと、彼は説く。我らが主は我らの罪を赦し、従って他人の罪をも赦すべきであり、イエス・キリストは全人類の罪を赦した。日本の軍閥による侵入という恩恵を受けたのだからと、中国人にいとも軽々しく過去の赦しを求める、この種の態度は余りにも仁を欠いている。キリスト教の教義からしても、罪を犯した者は罪を認めて詫びるだけではなく、相当する償いを行った後、漸く赦されるのであるから」⁴⁹⁾、と。

1936年になると、状況は更なる展開を示した。米国における宣教活動中の賀川が満洲国を擁護した事に対して在米中国人留学生が反発、抗議声明を⁵⁰⁾発した。この雑誌よりも後に発行された『聖公会報』では全く紹介されていないので、⁵¹⁾中国の教界における動揺を招いたか否かは不明である。しかし英字新聞もこの出来事を取り上げているので、⁵²⁾次第に不信感も醸成されたのではな

かろうか。

以上、満洲事変後に出された張雪岩による鋭い観察と併せて、期待や待望だけではなく、僅かではあるが本質的問題を剔出した賀川観が、日中全面戦争勃発前の時点において萌芽していた事実を、ここに確認しておきたい。

IV. 戦時下における失望／忘却——1937年以降の動向——

1937年7月7日の日中戦争勃発後、賀川をめぐる中国語論著の数は激減した。これは表1に見事に反映されている。直後の『興華週刊』は、既知の『愛的科学』中国語版「著者新序」を再びとりあげた。「日本において軍閥が暴威を振るう下、彼らに替って懺悔する人がいることが知られる」と宣揚するが、新たなる状況については、何も言及して⁵³⁾いない。

10月刊行の『佈道雑誌』は、英国で5月6日に発行された週刊誌に収録される賀川インタビューを翻訳して掲載、「日本のキリスト教徒は、真理のために命を捨てる事を恐れない」云々との意見を紹介するが、彼が最後に強調した部分、すなわち「日本には天皇が在位しており、民衆のリーダーとなっている。ファシスト・ヒトラー・ムッソリーニは、絶対にわが国では存在できない」といった一節まで、漏らさずに訳出した⁵⁴⁾。

こうした中で10月下旬、開戦後の言動に対する本格的批判が登場した。「東京から上海に来た某欧米人宣教師」からの便りとして、賀川は「日本軍の中国における暴行については明確なことを言わない。更にある欧米人の宣教師に対して『今次の上海戦は先に中国軍人が仕掛けたものだ』と語り、言外に責任を中国に擦り付けているようだ。したがって今回は、賀川氏が悲憤した作品を見ることもなく、お詫びの意も示されない。恐らく賀川氏の観察によれば、日本軍が無辜の平民を爆撃して、文化機関を破壊することも、みな正当な⁵⁵⁾のだ」と。

周知の通り日中戦争勃発に際して賀川は、「涙に語る」と題した反戦詩を書いた。これを秘書が英訳した後、1937年12月から翌年1月にかけて、欧米の雑誌に掲載されたというが、残念ながら中国で取り上げられた形跡は、いまのところ発見できない⁵⁶⁾。

1938年7月には、賀川の哈爾濱における伝道大会の様子が「北満洲バプテスト会消息」の片隅に⁵⁷⁾伝えられた。しかし同年11月17日、マドラスで開催される世界宣教会議の往路に立ち寄った上海・共同租界内で日本YMCA同盟の管理下にあったアスターハウス講堂において、「死を以ってあたる宣撫工作もこの決心が必要」と題した「日本軍閥の中国侵略を非難する講演」を実施した⁵⁸⁾というが、この状況について、中国側の一般紙誌はもとより教界誌においても、全く報道されることはなかった。

1939年10月末に『中央日報』は、米国のキリスト教週刊誌による社説を翻訳・転載、賀川批判の展開を詳細に伝える⁵⁹⁾。翌1940年になると、「平和の使徒・賀川」像を伝える記事を掲載した雑誌もあったが、内容は何れも戦前期における報道内容の再録に過ぎず、真新しさは無い⁶⁰⁾。1940年8月25日に渋谷憲兵隊に拘束され、松岡洋右らの尽力でまもなく釈放された際も、2誌がコメント⁶¹⁾抜きの記事として扱ったのみであった。

どうも、「救世主」扱いは終焉を迎えたようだ。誌面には、中華基督教青年会出身の神学者で

抗日救国運動の指導者に転じた呉耀宗（1893-1979）による、1938年11月におけるインドでの回顧が登場する。そこにはガンジーによる賀川への詰問の様子が記されていた。賀川は組合などの諸事業を守る姿勢を放棄して国家の名誉を死守するべきであり、そのために「公開して日本の侵略に反対する事を勧める。そうすれば、あなた個人が死ぬことによって日本を生きさせることができるのだ」という、「東方三博士」の一人による痛烈なもう一人の「東方三博士」賀川糾弾である。⁶²⁾ 呉耀宗が、どちらに肩入れしていたのかについては、もはや多く語る必要はないだろう。世界宣教会議時の模様については、1941年8月に、徐宝謙（1892-1944）も『申報』において述べるが、そこには各国代表からなるダゴール訪問団に「聞人（名士）賀川豊彦」は事情があって参加できなくなり、替りに村尾が参加したとあるだけで、その他の記述は全く見られない。⁶³⁾

こうした状況の中、書籍の発行状況を分析する過程で、興味深い事実を発見した。本章の最後に、これについて若干ふれたいと思う。

1937年7月の日中戦争勃発以降、中国で新たに出版された賀川豊彦をめぐる作品は、1冊のみだ。すなわち、許無愁・程伯群訳『友愛的合作経済学』（広学会、1940年2月）である。同書はもともと、Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics* (London 1937) として公刊されたもので、1936年に米国のコールゲイト・ロチェスター神学校ラウシェンブッシュ基金の招きで実施された「キリスト教的友愛と経済再建」と題する連続講演を収録した書籍である。その「訳者序文」においては、キリスト教精神が伴わない合作事業は存在しないと書いた賀川流組合論や、同書出版後の米国において組合事業が急展開した旨が記されているものの、従前の訳書や評伝に見られた賀川個人については、まったく言及されていない。⁶⁴⁾ 奥付によれば、広学会の住所はこの時点において、未だ上海・共同租界内の博物院路におかれているものの、発行所として雲南省昆明の住所が記されている。所謂「大東亜戦争」勃発前の段階であるため、法的に共同租界は安全な状況ではあったが、四周を日本軍に包囲されたのみならず、実質的「日本租界」たる蘇州河以北に隣接した立地を危惧して、大後方へと疎開した結果であろう。こうした時局が、訳者をして昔日の如き賀川に対する称賛を回避せしめた、かかる仮説は成立しないだろうか。

同様に、戦時下で重版された『愛的科學』第四版（広学会、1941年3月）に残された痕跡も、非常に興味深い（図1を参照）。初版は2000部作成されたようであり、その後も500部づつ重版されていた事実も、窺い知ることができる（図2を参照）。筆者はこれらを、上海図書館近代文献閲覧室所蔵図書において閲覧したが、初版と比較した場合、やはり発行地は昆明の住所に変更されている。目次や本文の頁数・内容とも初版と同一であったが、1934年2月8日付けで、賀川豊彦がルソン沖において執筆した「訳者新序」—良心の発露と絶賛されて来たあの序文—が、全て欠如していたのであった。肌色の装丁で包まれた、縦19センチ横13センチほどの小冊子あり、詳細なる観察を続けたが、刃物で削除されたような跡は、見付からなかった。無論、他の第四版まで調査した訳ではないので落丁かも知れず、最終的な断言はできないが、形状からみる限り当初からこの部分は、印刷されていなかったのではないか。では、何故か。すなわち、賀川の「良心」に対する疑念が、この書籍に刻まれていたのではないかと。

こうした類推の蓋然性を高めるには、もちろん他の状況証拠も必要となる。この点に関して、1939年に第三版が発行された『魂之彫刻』には、新たに北米長老教会から中華基督教会に派遣されていた A. R. ケプラー（1879-1944, Asher Raymond Kepler, 中国名は高伯蘭）による序文が加え

図1. 『愛的科学』昆明版の奥付

▲
版
權
所
有
▼

蔚
文
印
刷
局

原 著 者 賀 川 豐

譯 者 俞 康 德

發 行 者 兼 著 者 廣 學 會

昆 明 發 行 所 雲 南 昆 明 北 門 街 七 十 八 號 甲

愛 的 科 學

每 冊 國 幣 一 元 八 角
(郵 費 另 加)

中 華 民 國 廿 三 年 六 月 初 版

中 華 民 國 三 十 年 三 月 四 版

LOVE, THE LAW OF LIFE

By
Toyohiko Kagawa

Translated by
K. T. Yui

Fourth Edition

Price: \$1.80 *Postage Extra*

CHRISTIAN LITERATURE SOCIETY
128 Museum Road
SHANGHAI
1941

Kunming Depot: 78A Pei Men Kai, Kunming, Yunnan

(出典) 上海図書館近代文献閲覧室所蔵 (240210) より。

図2. 『愛的科学』の重版状況

愛 的 科 學 賀 川 豐 著 俞 康 德 譯
(一九三四) 三五六面 一元八角

本書以人類生活狀態の立足點，來發揮愛的原理。中分：『愛的創造』、『愛的進化』、『愛與性慾』、『愛與戀愛』、『愛與結婚』、『愛與倫理』、『愛與法律』、『愛與社會』、『愛與教育』、『愛與科學』、『愛與藝術』、『愛與命運』、『愛與上帝』等，欲知愛之真諦者，可於此書中博覽無遺矣。

Love, the Law of Life, by Toyohiko Kagawa, translated by K. T. Yui (1934) 356 pp. 1.80

For preachers, teachers and students of Christianity. Suitable for use in theological schools.

It discusses the principle of Love in the various phases of human life under such topics as The Beginnings of Love and Feeling, Love and Ethics, Love and Law, Love and Society, Love and Education, Love and Science, Love and Art, Love and Destiny, Love and God.

It is well translated, directly from the Japanese.

民國二十三年六月 初版 2000本
民國二十四年五月 再版 500本
民國二十八年七月 三版 500本
民國三十年三月 四版 500本

(出典) 図1と同じ。

られたというが⁶⁵⁾、閲覧した版本は1934年11月刊行の初版だけなので、具体的内容については確認できていない。

以上の観察結果を帰納すれば、次のよう中間的総括が可能であろう。

日中戦争勃発以降も、確かに賀川豊彦に対する中国側の関心はあった。しかし、戦前期のような「英雄」的扱いではなく、あたかも満洲事変以降の「時が満ちる」ように、ゆっくりと、だが確実に、歴史の表舞台から退場していった。⁶⁶⁾1945年夏、中国では「惨勝」後における短期間の平和が到来するが、まもなく国共内戦が勃発、東西冷戦を代理するが如き構図の中で、再び大混乱に陥った。この時、蒋介石と同様キリスト者であり且つ反共主義者であり、米国との結びつきも深く、更に言えば戦後日本の復興と「民主化」の旗手と目された事もある「平和主義者」賀川豊彦に向けて、なぜ中国側の関心は甦らなかったのか。

たしかに戦時下、賀川は官憲によって監視・抑圧され、反戦活動を満足にできなかった。時勢を理由に、こう語ることはたやすい。しかしながら、隣国における賀川ブーム全面退潮の背後に、日本国内における賀川自身による言動、すなわち信徒に「殉国即殉教」を勧奨するが如き超好戦的な公生活が増幅していた事実もまた、失念してはならない。⁶⁷⁾この負い目を、我々はいま一度、深く認識しておかねばならないだろう。

むすびにかえて

本稿では、蒐集し得た限りの素材に基づき、同時代を生きた中国人による賀川豊彦評価を概観、多少の見解を提示した。その結論的内容については、既に各章において述べたので、ここでは繰り返さない。要するに中国における論調とは、①社会改革の先行者として、社会各層と教界から慕われていた時期（1920年代）、②平和の使徒としての信頼・待望を、特に教界から寄せられた時期（1930年代前半）、③大いなる失望によって、教界からも忘却されていった時期（1937年以降）という、段階ごとの特徴を示したのである。

賀川は真摯に戦争を反省したので中国でも高く評価された云々という、「自画自賛」的歴史叙述は、本稿における乏しい実証によっても、止揚されるだろう。文中で利用した史料は冒頭で述べた通り、すべて公開したものである。これらを利用して、あるいは新しい素材を発掘して、読者諸賢による検証／反証がなされる事を、大いに期待したい。

最後に、本論において論究できなかった問題を呈示して、今後の研究に向けた課題とする。

既に先学たちが究明した通り、要所要所で賀川豊彦は日本による侵略を詫びて、相手方から強い好感を持たれた。これは疑いなき事実であり、その高潔な人柄を示した行為であったという評価には、なんら異論を挟むつもりはない。但し熟慮すべきは、ここでいう「罪」とは何であるか、という問いである。

〈軍閥〉の「罪」であるとか、〈日本〉が中国で犯した「罪」であるとか、彼が繰り返して謝した「罪」とは、果たして crime や guilt としてのそれだったのか。⁶⁸⁾

牧師でもあった賀川によって語られた「罪」とは、神の目的に逆らった結果、神から人間が離反した状況としての sin を意識して用いられたのであろう。神の掟（律法 law）を破ったり、神の

望み通り行動できなかつたり、神への反逆などに起因した sin である。個人が主語として犯した sin については、①悔い改めの洗礼に表象された神への立ち返りによって乗り越えられるべきもの（共観福音書・使徒言行録）、②イエス・キリストを啓示者と認める決断により脱せられるもの（ヨハネ福音書）、③律法の求めを自力で満たそうとする人間の自己正当化の努力こそが最大の罪なのであり、十字架の贖罪に示された「神の義」を信仰によって受け入れることにより「神の恵みにより無償で義とされる」もの（パウロ書簡）、などといった神学的説明が可能だ。⁶⁹⁾

とするならば、原則的に sin とは、神と〈私〉との対話に基づく関係性の回復によって sin を犯した〈私〉が赦されるのであって、別言すれば、〈国家〉やその構成体の一部である〈軍閥〉といった集合名詞が働いた crime に対して、かかる信仰義認論はアプリオリに適応できないだろうに。

1939年3月、賀川は次のように語った。「日本人がもしこの贖罪愛の潔めを受けるならば、日本人は堂々と世界的に乗り出すことになり、支那のために善き指導者となることは勿論、我らの祈る如く東洋の平和を確立し、やがて世界平和への貢献を為し遂げることとなるであらう」⁷⁰⁾。

〈国民〉の多くが悔い改めキリスト教徒になれば、万事は意の如く進展するという、あまりにも単純でお目出度い語りである。百万人を改宗させれば十分なのか？あるいは皇室を含む「一億総懺悔」を経たクリスチャン化まで必要なのか？「潔め」があれば、全ては許されるのか……。よもや、万民を救済する超越者／仲保者とは他ならぬ賀川豊彦自身である、とまでは主張しなかつたであろうが。

国際社会の荒波に揉まれ抜いた一人の明治人として、賀川は〈私〉と〈国家〉との距離を相当程度に一体化させた。別の表現をすれば、相対化された〈国家〉観を構築できなかつたのであろう。そして、これに対する批判は、超歴史的かつ不当な論難になるのかも知れない。〈私〉の信念や信仰と〈国家〉意思との違和感や緊張関係が臨界点に到達した時点で、〈私〉がそこから離れて一抵抗せよとは求めない。せめて一沈黙する道を、彼は選択しなかつた。

のみならず賀川豊彦は、〈私〉と〈国家〉という本来ならば同一化できない主語を自由自在に入れ替えながら、信仰による sin たる「罪」からの救済という形而上的かつ普遍的な事柄をば、形而下的かつ一回性的に積み重なった crime たる「罪」の赦しへと安易に直結せしめ、数多くの人々に向かって語り続けた。かかる思考回路の中に、戦時における賀川の転向、そして本稿が見た如き中国における関心低下の、本質的原因が所在したのではなからうか。（了）

（附記）本稿は、2016年7月16日、明治学院大学キリスト教研究所において開催された中華圏プロテスタント研究会第12回定例研究会における報告「中国における賀川豊彦評価をめぐって」を、大幅に改稿したものである。当日、数多くの建設的な意見を寄せて下さった方々に、謝意を表したい。また、勤務先における日常生活の中で、今春定年退職を迎えられる田中祐二先生からは、原理原則を堅持する姿勢について、貴重な教えを受けた。時流に巻き込まれることなき学究生活とは、いったい如何なるものであるか、という。心よりお礼を申し上げる。

註

- 1) 『賀川豊彦関係 中国語雑誌・新聞記事史料（暫定版）』は、賀川豊彦記念松沢資料館・賀川記念館・明治学院大学キリスト教研究所に寄贈した。ただ、これらの公的機関の利用に不便がある場合には、筆者に照会されたい。連絡先は、次の通り。〒525-8577 草津市野路東 1-1-1 立命館大学経済学部内。
- 2) 米沢和一郎『人物書誌大系 賀川豊彦』Ⅰ・Ⅱ（日外アソシエート、1992年・2006年）、及び同『賀川豊彦の海外史料』Ⅰ・Ⅱ（明治学院大学キリスト教研究所、2006年・2007年）に示される史料発掘の成果、更に米沢が蒐集した史料を丹念に分析・利用した布川弘「一九三〇年代における賀川豊彦の平和運動」（『日本史研究』第424号、1997年）、及び同『平和の絆—新渡戸稲造と賀川豊彦、そして中国』（丸善、2011年）における優れた成果を意識した評価である。
- 3) この点について、劉家峰「賀川豊彦と中国」（『東アジア文化交渉研究』別冊6、2010年）は、筆者も紹介する諸文献を本格的に利用した先駆的労作であり、是非とも参照されたい。但し、平素研究を進める場が中国であるためか、日本国内において賀川研究に従事する人々に向けた「史料の共有化」促進の役割について、余り意識されていなかったと思われる。
- 4) 例えば、劉家峰「近代中日基督教和平主義の命運—以徐宝謙与賀川豊彦為個案的比較研究」（『浙江学刊』2007年第2期）、劉莉『賀川豊彦与二十世紀中国基督教思潮』（華中師範大学碩士學位論文、2008年）、陶波『追求互济与和平—試論太平洋戦争前後の賀川豊彦』（復旦大学碩士學位論文、2011年）など。最近では、庾凌峰「戦前の中国における賀川豊彦の受容に関する一考察—1931年から1936年までの雑誌や新聞を中心に」（第29回賀川豊彦学会大会報告レジュメ、2016年9月10日）、あるいは陶波「賀川豊彦とアジア主義—満州基督教開拓村を中心に」（中華圏プロテスタント研究会第13回定例研究会報告レジュメ、2016年12月23日）などに示される意欲的研究の公刊も期待される。
- 5) 戦時下の賀川豊彦と中国という、従来は忌避された感もある微妙な問題に対して、松谷暉介「賀川豊彦と中国—『宗教使節』問題をめぐって」（『キリスト教史学』第67集、2013年）は、実証的に史実に迫った画期的成果である。また松谷論文から啓発を受けた拙稿「賀川豊彦の中国—語られ方／語り方」（『キリスト教文化』通巻第7号、2016年）における議論も、併せて参照されたい。
- 6) 賀川豊彦と中国に関する実証研究を長く続け、優れた成果を世に問うている浜田直也『賀川豊彦と孫文』（神戸新聞総合出版センター、2012年）、及び同『「五・三〇運動」と日本労農運動家—鈴木文治、賀川豊彦、芳川哲の軌跡』（森時彦編『長江流域社会の歴史景観』京都大学人文科学研究所、2013年）においては、『民国日報』や『時報』における報道記事が、丹念に利用されている。これらの増補は、早急な課題としたい。
- 7) この作業は、中華統行委辦会調査特委会編、蔡詠春・文庸・段琦訳『1901—1920年中国基督教調査資料（原《中華婦主》修訂版）』下巻（中国社会科学出版社、2007年）、何凱立著、陳建明・王再興訳『基督教在華出版事業（1912—1949）』（四川大学出版社、2004年）、趙曉蘭・吳潮『伝教士中文報刊史』（復旦大学出版社、2011年）の他、特に伍傑主編『中文期刊大詞典』上・下（北京大学出版社、2000年）を利用して進めた。
- 8) 例えば、張慶軍・孟国祥「蒋介石與基督教」（『民国档案』1997年第1期）、斐京漢「蒋介石與基督教—日記里的宗教生活」（中国社会科学院近代史研究所編『民国人物與民国政治』社会科学文献出版社、2009年）、また胡歆歆「簡論蒋介石與基督教」（『大慶師範学院学報』第33卷第4期、2013年）、王淼「論抗戰初期中国基督教会的愛國救亡活動」（『長春大学学报』第25卷第3期、2015年）などを参照。
- 9) この数値はとりあえず、王美秀『中国基督教史話』（社会科学文献出版社、2011年、157頁）に掲載された、1933年の信徒数によって提示した。
- 10) 『賀川豊彦入門』（賀川豊彦記念出版会、2014年）159頁。
- 11) 陳独秀「労働者底知識從那里来？」（『新青年』第8卷第3期、1920年11月）134～135頁。
- 12) 陳独秀「基督教與基督教会」（『独秀文存』卷一、亜東図書館、1922年8月）659～662頁。
- 13) 巧尊「賀川豊彦氏在中国的印象」（『民国日報副刊 觉悟』1922年7月14日）1面。

- 14) 黄日葵「詩 贈賀川豊彦先生」（『晨报附刊』1921年11月，2～3面，及び『少年中国』第3巻第6期，1922年1月，35～36頁）。
- 15) 日生「賀川豊彦與日本劳工運動—一個簡單的介紹」（『東方雜誌』第24巻第19号，1927年10月10日）25～27頁。
- 16) 『基督化經濟關係全国大会報告』（中華全国基督教協進会，1927年10月）3～6頁。
- 17) 同上書，14～20頁，及び30～41頁。
- 18) 朱懋澄『調查上海工人住屋及社会情形調查記略』（中華全国基督教青年会全国協進会職工部，1926年5月）。
- 19) 『工業改造—基督化經濟關係全国大会專号』第13期（中華全国基督教協進会工業委員会，1927年8月）13頁。
- 20) 邢德著・陳其田訳『日本基督教社会主義者 賀川豊彦評伝』（中華全国基督教協進会基督化經濟生活委員会，1928年3月）1頁。
- 21) 費睿思「『人』的建築者—賀川豊彦」（『女青年月刊』第7巻第1号，1928年1月）9頁，12～13頁。
- 22) 盧広錦「基督徒青年賀川豊彦」（『真理與生命』第2巻第14号，1927年11月）404頁。
- 23) 水「讀了賀川豊彦先生的『基督教與經濟革命以後』（『文社月刊』第3巻第1冊，1927年11月）94頁，97～98頁。
- 24) 1920年代の動向については，石川照子「第五章 中華民国の社会とキリスト教」（渡辺祐子ほか著『はじめての中国キリスト教史』かんよう出版，2016年）の，簡にして要を得た概説を参照されたい。また，ナショナリズム勃興と中国キリスト教の關係については，唐曉峰・王帥編『民国時期非基督教運動重要文獻匯編』（社会科学文献出版社，2015年）に収録された各種史料が，たいへん参考になる。
- 25) 汪嶼「賀川豊彦生平之事業」（『興華週報』第25巻第31期，1928年8月）11～12頁。
- 26) 「賀川豊彦証道談 誠序」（『賀川豊彦証道談』上海広学会，1929年11月）序1～2頁。
- 27) 「賀川豊彦創立全日非戦同盟」（『軍事雜誌』第4期，1928年10月）3頁。
- 28) 王「賀川豊彦」（『明灯』第154期，1930年2月）302～303頁。
- 29) 「全国幹部夏令会消息 賀川豊彦応約到会」（『中華基督教全国総会公報』第2巻第7期，1930年5月）563頁。
- 30) 蔣翼振「我所欽佩的東方偉人之一—賀川豊彦」（『明灯』第160/161期，1930年8月/9月）413～414頁。
- 31) 俞伯霞「賀川豊彦演講拾珍」・同「賀川豊彦演講義拾珍（続）」，『真光』第29巻8号～9号。
- 32) この日程は，「賀川豊彦到濟演講」，「賀川豊彦到滬演講」（『中華基督教女青年会会務鳥瞰』第2期），及び「賀川豊彦在華演講日程」（『興華週報』第28巻第8期，1931年3月）などを参照。
- 33) 田耀宝「聽了賀川豊彦氏演講以後」（『微音』第1巻第2期，1931年4月）108～111頁。
- 34) 聞保塘「日本的基督教（続）」（『興華週報』第28巻第17期，1931年5月）7頁。
- 35) 鄭希聖「春季聯合佈道記（安徽）」（『興華週報』第28巻第12期，1931年4月）32頁。
- 36) 「日本基督教社会主義運動者賀川豊彦」（『南大青年週刊』第19巻第12期，1931年5月）1～2頁。
- 37) 前掲・布川『平和の絆』92～98頁，及び153～154頁。もちろん布川は，満洲事変前になされた「謝罪」が，満洲事変後に公表された経緯について丹念に検証している。だが管見の限り，史料作成時間と史料公開時間のズレを看過した結果，賀川の「謝罪」を過大に強調した見解が，かなり多いのではないか。
- 38) 郭一中『賀川豊彦』（上海広学会，1932年5月）5頁，42～46頁。
- 39) 賀川豊彦「悩みの子」（『雲の柱』第10巻第11号，1931年12月）11頁。
- 40) 「日人賀川豊彦の詩—一個痛心的孩子」（『興華週報』第29巻第18期，1932年5月）5頁。
- 41) 「賀川豊彦被囚」（『佈道雜誌』第5巻第4期，1932年7月）73頁，及び前掲布川『平和の絆』153～154頁。
- 42) この点については，前掲・拙稿「賀川豊彦の中国」48～49頁を参照。別の表現をするならば，信仰

- を共有しない「世間」に向かって、賀川は何を呼びかけていたのかという問題でもあるだろう。
- 43) 張岩雪「東瀛帰来」(『金陵神学誌』第15巻第8期, 1933年10月) 28~31頁。
 - 44) 「賀川豊彦重来中華」(『平民月刊』第10巻第4期, 1934年4月) 8~9頁。
 - 45) 活動の日付順に整理すると、次の通りである。3月5日の嶺南大学は、「賀川豊彦到校演講」(『嶺南大学校報』第6巻第13期, 1934年3月) 203頁；3月9日の日本人倶楽部は、「賀川豊彦」(『平民月刊』第10巻第5期, 1934年5月) 7頁；3月10日のYWCAは、浣華「賀川豊彦與日本对華侵略」(『興華週刊』第31巻第16期, 1934年5月) 4~6頁、及び「賀川豊彦與日本对華侵略」(『佈道雜誌』第7巻第4期, 1934年7月) 60頁；3月11日の景林堂は、「賀川豊彦與日本軍閥」(『聖公会報』第27巻第7期, 1934年4月)。
 - 46) 賀川豊彦著・俞康徳訳『愛的科学』(広学会, 1934年6月) 著者新序1~2頁。
 - 47) 註43と同じ。
 - 48) 愛克斯林著・明日報社編訳『賀川豊彦の生平』(広学会, 1935年4月) 96頁。
 - 49) 「賀川豊彦與日本軍閥」(『聖公会報』第27巻第7期, 1934年4月) 3頁。
 - 50) 黄初葵「密希根全体中国学生反对日本伝教士賀川豊彦」(『留美学生月刊』第1巻第5期, 1936年4月) 5頁。
 - 51) 「賀川豊彦の行踪」(『聖公会報』第29巻第18冊, 1936年9月) 29頁。
 - 52) 'Chinese Walk Out On Speech By Kagawa, Japanese Talker's Use Of Word 'Manchuko' Provokes Incident, *The China Press*, 29th, may, 1936. この記事について、註4で紹介した陶波による研究会報告レジュメより知り得た。記して感謝を申し上げる。
 - 53) 「賀川豊彦為日本軍閥懺悔」(『興華週刊』第34巻第28期, 1937年7月28日) 11頁。
 - 54) 「賀川豊彦対於中日關係の主張」(『佈道雜誌』第10巻第10/11期, 1937年10月) 47頁。
 - 55) 濟澤「賀川豊彦近訊」(『興華週刊』第34巻第41号, 1937年10月) 15~16頁。
 - 56) 前掲・米沢編『人物書誌大系 賀川豊彦』II, 628頁。
 - 57) 「日本賀川豊彦牧師来哈」(『真光』第37巻第8期, 1938年7月) 53頁。「立体農業」提唱といった目的のみならず、この訪問時に面識を得た松岡洋右・甘粕正彦・坪上貞二らとの関係強化の下、まもなく賀川が「満洲基督教開拓村」政策推進という、国策に密着した運動を指導した歴史については、既に知られる通りである。
 - 58) 前掲・米沢編『人物書誌大系 賀川豊彦』II, 628~629頁。
 - 59) 「駁賀川の呼籲」(『中央日報』第三版, 1939年10月31日) 3面。
 - 60) 「日本賀川豊彦早五年上海对中国教界領袖説話」及び「賀川豊彦の懺悔」(『佈道雜誌』第13巻第3/4期) 33~34頁。
 - 61) 「賀川豊彦被拘」(『雑誌』第8巻第4/5期, 1940年9月) 49頁、及び声声「賀川豊彦被拘」(『新東方雜誌』第2巻第2期, 1940年10月) 34頁。尚、後者は対日協力雑誌であった。
 - 62) 「甘地與賀川豊彦」(『長風』第1巻第4期, 1940年9月) 49頁。
 - 63) 「印度詩聖 泰戈爾訪問的回顧」(『申報』1941年8月25日) 2面。
 - 64) 賀川豊彦著、許無愁・程伯群訳『友愛的合作経済学』(広学会, 1940年2月) 訳序1~2頁。
 - 65) 「新書及重版書介紹 魂之彫刻(第三版)」(『明灯道声非常時合刊』1939年6月) 36頁。
 - 66) たとえば、賀川が中国を救う道であると説いた「協同組合運動」をみてみよう。当該分野の国内外における研究動向を丹念にサーベイした上で、優れた実証研究を重ねている菊池一隆『中国工業合作運動史の研究』(汲古書院, 2002年)、及び同『中国初期協同組合史論 1911—1928』(日本経済評論社, 2008年)などの成果の中において、賀川豊彦には特記されるような評価が与えられていない。同「現在の中国工業合作運動について一盧広綿氏に聞く」(『季刊中国研究』第11号, 1988年)におけるインタビュー中で、盧広綿は、1928年訪日時に賀川らと会ったことを、「合作社を組織させる契機」のひとつだと述べている(71頁)。社会科学分野においてかかる扱いを受ける理由についても、冷静に再考する必要があるだろう。

- 67) 矢内原忠雄は戦時中から賀川を嫌い（「日記 昭和十七年一月一日」、『矢内原忠雄全集』第28巻、岩波書店、1965年、745頁）、そのためか無教会の賀川評価は、戦後においても極めて低い（例えば、『基督教独立伝道者 村田大造著作集』第10巻、村田大造著作刊行会、1985年〔福岡市立総合図書館所蔵〕、に収録された、1960年代の激しい賀川批判を参照）。これについて山折哲雄は「インテリ対大衆」の構図の中に「賀川排除のメカニズム」を見いだすが（山折哲雄「抑圧された賀川思想の回帰」、『季刊 at』第15号、2009年）、賀川の朝鮮・台湾・満洲や中国をめぐる言説を思い起こすと、「床屋談義」と大差なき内実不足も、嫌悪の一因として挙げられるだろう。このうち、特に戦時期における「中国」観や戦意昂揚のための言動については、さしあたり拙稿「棟方文雄『戦争と教会』の歴史的背景」（『ユークロノ』第238号、2016年、83～87頁）で指摘した史実を、是非とも参照されたい。
- 68) 人間が「ハルマティア」から「メタノイア」する過程において、赦されるのは原罪か、現行罪か、犯罪かという問いに、置き換えられるかも知れないが、筆者の力量を遙かに超えるテーマであるため、議論は留保する。荒井献など監修『ギリシア語新約聖書釈義事典』Ⅰ（教文館、1993年）98～101頁、140～141頁などを参照。
- 69) ドナルド・K・マッキム著、高柳俊一など訳『キリスト教神学用語辞典』（日本キリスト教団出版局、2002年）303～305頁、及び土屋博「つみ（罪）」（木田献一・山内眞監修『新共同訳聖書事典』日本キリスト教団出版局、2004年）425～427頁、等を参照しながら整理した。
- 70) 賀川豊彦「興亜と十字架」（『雲の柱』第18巻第5号、1939年3月）6頁。